

## 当院検査室における血清フェリチンの試薬検討について

◎尻無濱 真子<sup>1)</sup>、村松 すみれ<sup>1)</sup>、平山 すみれ<sup>1)</sup>、鈴木 航平<sup>1)</sup>、石川 秀和<sup>1)</sup>、大塚 美和<sup>1)</sup>  
掛川市袋井市病院企業団 中東遠総合医療センター<sup>1)</sup>

「はじめに」フェリチンは、肝臓、脾臓、骨髄などの網内系細胞の他、心臓、肺、腸管など、全身の臓器に広く分布する鉄貯蔵蛋白質である。一般的に鉄過剰の疾患や炎症性疾患で高値、鉄欠乏性貧血に伴い低値を示すことが知られている。血清フェリチンは組織内貯蔵鉄量を反映し、鉄欠乏性貧血においては最も鋭敏で治療評価に有用な指標である。当院検査室では、フェリチンの結果報告までに60分要しており、外来からの結果催促が多かった。今回我々は生化学測定装置に搭載できる直線性が2000ng/mLまでかつ初回値が30分が出るラテックス凝集試薬が販売され、その試薬検討を行ったので報告する。

「試薬と方法」測定試薬は、FERーラテックスRX「生研」（デンカ株式会社、以下 デンカ）を使用した。測定装置は、自動分析装置JCA-BM6070（日本電子株式会社、以下日本電子）で行い、全自動化学発光免疫測定装置ARCHITECT2000i（アボットジャパン合同会社、以下アボット）との相関データをとった。血清検体を用いて日本電子とアボットの両装置での同時再現性、希釈直線性、プ

ロゾーン、検出限界、相関性を調べた。

「結果」血液内科臨床医から移行期間として旧検査法のデータも載せるよう依頼があった。そのため、新検査法から旧検査法の数値の換算データを載せて対応した。相関をとった結果、回帰式の傾きが大きく異なることが判明した。1000ng/mL以下と1000ng/mL以上（高値）の時で計算式を変えて換算値を旧検査データとして報告するようにした。

「考察」試薬変更によって測定所要時間が短縮され、外来からのフェリチンの結果催促は無くなった。今回の試薬変更は大きな意義があったと思われる。しかし、測定機器や試薬により測定値が変動するため、臨床医への周知が必要となる。今後も試薬変更を検討していくことで迅速により良い結果報告を行えるように努めていきたい。

中東遠総合医療センター 0537-21-5555 内戦 2219